
未来テレビ

優友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来テレビ

【Nコード】

N8126U

【作者名】

優友

【あらすじ】

数々の企画を成功へと導いてきたエリート部長。今回の企画も楽勝だと鼻をくくる彼だったが……。

ブログ上でも掲載しています。

「以上で私からの報告を終わります」

。。会社の会議室、休日の早朝などとは言ってはられない大企業のその一室は暗かった。集まった面々は重役から平社員までみな一様に室内唯一の光源であるスクリーンと、手元の資料を交互に睨んでいる。

たった今プレゼンを終えた男は、しかしいくらあらを探そうとも彼らが自分の報告からどんな不安要素も取りだしえないに決まっていると高慢に鼻を鳴らした。なぜなら男は会社創設以来のエリートと呼ばれ、その実力は入社するやいなや数々の企画を勝利に導き、今や弱冠二十七歳の若さで部長の座に上りつめているほどだった。

「質問がなければさっそく企画に取りかかろうと思いますが」

男は喋りながら会議室を覆うカーテンのところまで優雅に歩いていき、サッとそれを払った。眩しい朝日が男の勝ち誇った横顔を照らします。

「……うむ、異議はない。さすがだ」

そう声を発したのは社長だった。慇懃に一礼する男に「しかし」と社長は付け加えた。

「やはり」あの”コンサルティングシステムの審査を受けてからだ。あれにクリアできなければ計画に着手することはできない」

また経費の無駄遣いのようなことを。俺の計画に絶対に間違いは

ないというのに。

男は内心で鼻を鳴らしたが、間違えても顔には出さない。

「かまいません。是非審査をお願いします。あれのお墨付きがあれば私も百人力です」

会議室の扉が開く。ガラゴロと荷台に乘せられて男の前に運ばれてきたのは二メートル四方ほどの大型テレビジョンだった。係員がスイッチを入れ、リモコンで「プロジェクトの結果」と入力する。しばらく暗闇が映ったあと、画面が明るくなる。映像の中央には、大手ショッピングモールのカートにどっさりと積まれた新商品の姿があった。男が今し方プレゼンを行ったものである。

しかしどこか様子がおかしい。うずたかく積まれたカートの前を客は素知らぬふりをして通りすぎていくのだ。徐々に会議室のそこかしこからひそひそと声があがる。バカな！　こんなはずはない！　男は焦る。

「貸せ！」

係員からリモコンをもぎとると男は「早送り」のボタンを押した。しかしカートの前を人々がきゅるきゅると通りすぎていくだけで商品は一向に減る様子がない。

「もうよい」

鶴の一声が会議室に響いた。社長が立ち上がっている。

「今回は残念だった。しかし結果がこれでは、な」

みんな朝早くから御苦労だった。解散！　社長の声とともに社員

たちがやれやれと会議室を去っていく。

「待ってください社長！」

男は社長の前に立ちはだかった。

「この私に、私の企画に限ってこんな間違いは――」

「何を言っているんだ君は」

社長は男の嘆願をにべもなくはねのけると冷たく言った。

「君の今までの成功だってあの『未来テレビ』に裏付けされたものだったろう。あれを疑うということは君、これまでの君の功績を疑うということだ」

男はぐうの音も出ない。社長が会議室を後にするのをただ呆然と見送ることしかできなかった。

*

男はひとり悲しくとぼとぼと帰り道を歩いていた。その横顔を夕日が悲しく照らす。ため息の絶えない男の耳に近くのパークから子どもたちの声が聞こえてきた。

「なあかけっこしようぜ！」

「さんせー！」

「ちょっと待って、その前に……」

ひとりの男の子が携帯電話を取りだした。それは『未来テレビ』が内蔵された最新型の端末だ。男の子は画面に「かけっこ」と打ち込んでいった。子どもたちはしばらく食い入るように小さな画面を見つめる。

「やった！ 僕が一着だ！」

「あゝあ、俺はドベかよお」

それぞれ一喜一憂する子どもたちの声が公園にこだまする。

「かけっこはもういいや。なあ次は鬼ごっこやろうぜ！」

「オーケー！ えーと……」

子どもたちの目はまた画面へと向けられる。たぶん次はあの携帯の画面に『鬼ごっこ』と打ち込まれるのだろう。男はそう思った。

なぜ自分がこんなにもみじめな思いをしなければならないのかと男は思った。あの企画さえ通れば自分は時期重役も間違いないのだ。たのだ。何しろ自分はエリートなのだから！

悪いのは一体なんだろうと男は考えた。そうだ、悪いのは俺じゃない。悪いのは俺の作った商品のよさがわからないバカな客、バカな社長だ！

男は携帯を取りだす。もちろん最新型の『未来テレビ』が内蔵されている端末である。そうして画面に打ち込んでいく。

「プロジェクトの成功」

画面に流れる映像を、男は酔ったように眺めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126u/>

未来テレビ

2011年10月9日11時52分発行